

第3章 研究のまとめと課題

1. 研究のまとめ

今年度、私達は、「幼児期の『学び』を探る」というテーマを掲げ、さらにサブテーマ「からだで感じるということ」を設け、事例を通して検証しながら研究を進めてきた。その際、『学び』と「からだで感じる」ことがどうつながるかをはっきりさせるために、意図的に環境の中に直接体験の場（はだし、外遊びなど）を仕組んできた。そこで見えてきたことを以下にまとめることにする。

(1) 直接体験すること

P 40の事例5では、はじめダンゴムシに全く触れなかったH児が、教師の働きかけによって触ることができるようになった経験がもとになり、やがてダンゴムシを自らつかまえられるようになった。そして、ダンゴムシを媒介に教師と積極的にかかわり、遊びを工夫しながら発展させている姿が見られる。また、P 28の事例7では、Y児が自分で直接カタツムリに触れることで、心から不思議と感じたり驚いたりしている。さらにP 14の事例3では、A児が、砂と水のもつ不思議さに出会い、知的好奇心を揺さぶられている様子が見られる。これらの事例から幼児らは直接体験の中で五感をフルに働かせて、からだ全体で感じながら生き生きと多くのことを学んでいることが見えてきた。

さらに、直接体験を積み重ねることで、徐々に自分の「からだで感じた」こと（「痛い」「冷たい」「うれしい」など）を基準にして判断し、行動しようとする姿につながっていくことがP 62のT児の姿からも見てとれる。つまり、直接体験を積み重ねていく中で、「からだで感じたもの」が自分の考えのベースになっていくのではないと言える。

この時、直接体験へのアプローチには、大きく2つが見えてきた。

- ・ 興味、関心、意欲を伴った自主的なアプローチ（P 13のS児、P 38のH児）
- ・ 教師や友達からのかかわりによる受け身的なアプローチ（P 22のY児、P 71のS児）

上記2つのアプローチを保障することは、その幼児なりにからだを通して学んでいく時にとても大事であることが見えてきた。

(2) 教師や友達とかかわること

P 10の事例1－4は、教師がR児の心に寄り添ったことで、R児自身の心が開かれてきた事例であり、P 25の事例5は、教師の姿をモデルにしながらY児自身が遊びこんでいった事例である。またP 62の事例9では、気の合う友達とのかかわりが拠り所になって、今まであまりかかわりがなかった友達との新しいかかわりが生まれた事例であり、P 71の事例4は、教師の助言を受けてやってみたところ成功体験をすることができた事例である。これらの事例は、いずれも「教師や友達とのかかわり」がポイントになっている。「教師や友達とのかかわり」が、“心の解放”“信頼関係”“安心感”“自信”といったものにつながっている。そして、それらが幼児一人一人の直接体験を支えているものになっているということが見えてきた。

(3) 自然とかかわること

土、砂、水、虫、草花などの自然物は常に変化し、幼児らの興味関心を誘うものであり、その変化に幼児らは目を見張る。ヨモギをすりつぶしたり、ダンゴムシを枯れ葉の下から見つけ手のひらで転がしたり、ツツジの蜜を吸ったりなど、その“みる”“きく”“かぐ”“ふれる”“あじわう”といった「五感」を通しての行為の中には、無意識のうちに何かを学び取っているという目に見えないものが沢山含まれている。それは、P 38のH児のように興味関心を深めたり、P 31の大型水槽の場に見られるように心が解放されたり、P 15のA児が何度も同じ行為を繰り返したりといった幼児の姿から見てとることができる。このように、自然物にかかわって「からだで感じる」からこそ、深い驚きや新たな感動が生まれる。更にその時の気持ちは、「不思議だ」「面白そう」「やってみたい」という気持ちを起こしたり、支えたりする原動力になっていることが見えてきた。

以上のように、様々な直接体験をする中でも特に、外で自然物と触れ合ったり、それら遊びに取り入れたりすることは、幼児らの「学び」のチャンスを大きく広げていると言える。

2. 今後の課題

今年度、「幼児期の『学び』を探る」という研究テーマを掲げたときに、『学び』とはなんぞや?という問いに対して、教師間でもいろいろな仮説が論議された。その中で、「幼稚園における経験内容を自分の中に取り入れるプロセスそのものが『学び』なのではないか」という考え方が、今の私達の捉える『学び』に近いのではないかという見解に至っている。しかし、まだ明確なものとはなっていないので、今後も事例検討を繰り返していく中で、『学び』とは何なのかを探っていききたい。

また、今年度、“からだで感じるということ”というサブテーマを設定し、“からだ感覚”という切り口で事例を収集し、『学び』の様相を探ってきたが、切り口が広すぎたのではという反省があった。研究を進めていく中で、事例に述べられている“からだ感覚”は、「皮膚感覚」と「心の中の思い」の大きな2つの視点に分類できることが見えてきた。しかし、特に視点を絞っていくことはしなかったため、それが切り口の広さを感じる要因になっていたのかもしれない。この2つの視点をどう扱っていくかが今後の課題である。

さらに、今後も引き続き『学び』を探るに当たって、まず、一人一人が対象と出会った時に、どんな方法でどのようにその対象とかかわっていくのかをしっかりと捉えていきたい。例えば、新しい活動に出会ったとき、「まず行動に移す」「行動しながら考える」「頭で考えてから行動する」「誰かが行動するのを待っている」といったように様々なかかわり方がある。だからこそ、個々の『学び』を柔軟に様々な角度から捉え、その捉えをもとに、個々に応じた適切な環境の構成や援助を、教師間で連携をとりながら、保障していきたい。